大津百町瓦版

秋　季　号［No．３１］
２０１６年１０月
発行　大津の町家を考える会

大津市中央１丁目８－１３
TEL・FAX　077-527-3636
Email：otsu.machiya@gmail.com

大 津 ・ 町 家 ・ まちなか ・ いろいろ情報

竜が丘俳人墓地
忘れていませんか貴重な観光資源

大津市指定文化財でありながら、あまりのロケーションの悪さに、来訪者が限定的な竜が丘俳人墓地。もとは義仲寺の寺領で奥ノ院に当たる地であったそうです。

現在は、東海道本線と国道１号線によって分断され、場所的に孤立しています。この周辺にはほかに観光の目当てになるものもないので、目的意志をもった人しかわざわざ来られません。行ったところでとても狭い場所なので集団で訪問などできないのです。

この地に俳人塚が営まれるに至ったのは、芭蕉の門人の内藤丈草がここより少し西の手の地に仏幻庵を営んで住んでいたおり、芭蕉を供養するために一字一石の法華経塚を造ったのが始まりだと言われています。そして丈草は亡きあと遺言によってここに葬られました。それから丈草につづいて可風、文素、蝶夢、巴静、東華坊、蟻洞、正秀、松琵、雲裡、方堂、梅室、祐昌ら等々一九人もの墓石が造られたそうです。

芭蕉を迎え慕った人は各地に数限りなくおられたからこそ、芭蕉故地を売りにする都市は全国に多数あって、どこも観光の目玉としており、芭蕉を模したゆるキャラも複数存在します。そして芭蕉の句碑も全国に何千もの句碑があるらしいですが、しかしこのようにまるで句会を開いているような形で、芭蕉の門人等が一堂に眠っている墓地は何処にも無いのではないかと思います。

芭蕉を思慕する俳人や、俳句ファンにはそれこそ聖地の一つと言えるのではないでしょうか。

義仲寺と幻住庵を擁する大津市は、松尾芭蕉ゆかりの地として観光アピールしていますが、あまり力が入ってないように思うのです。

★一九九五年大津市発行の「大津ふるさと紀行」を参考に大津の町家を考える会編集部がまとめました。

町家を残し誇りにしたい

大津市松本２丁目　旧松嶋家

町家は歴史的文化遺産です

大津市松本２丁目にあったこの町家については、２年前龍谷大学エンパワの学生グループが訪問しいろいろお話を伺っています。旧東海道と浜通りの分かれ道に面して建てられたかなり大きく立派な町家です。これだけの規模を誇る立派な町家は大津ではなかなか見られませんが、残念ながらこの９月（2016）に解体されてしまいました。

龍谷大学の学生が聞いたところでは、この家は江戸時代の文化の大火（1810 頃）があった頃に建てられたそうで、昭和１５年頃から「松嶋洋裁学校」として使われていたとのこと。家の中には女中部屋もあり、東海道側の入り口から直結している蔵は漬け物小屋として使用されていました。家と蔵の間には防犯のため、夜間犬を放す「犬走り」という細い道が設けられていたそうです。さらに聞くと、このお家は「久野久」というピアニストの生家だと仰っていました。調べてみると近年になってこのピアニストのことについて書かれている出版物がありました。滋賀県文化振興事業団の「湖国と文化」1998 年春号（８３号）で近江の女性シリーズのところに「ピアニスト久野久(1886 生 東京音楽学校教授)」として書かれていたそうです。そしてこの久野家は明治４２年の滋賀県資産家一覧にも記載されているそうで、この立派な町家も納得できました。

前期『萬塾』三回を終える

今年の「前期萬塾」は「知っているようで知らない大津百町」として三回にわたる連続講座を実施しました。

第一回は、大津百町に関して元禄時代に書かれた古文書「百町覚」を読み解く講座を大津市歴史博物館の高橋学芸員に解説をして頂きました。そして第二回は「大津百町の昔といま・・」と題して江戸百町時代の地図を資料に、大津市歴史博物館館長の樋爪館長による講座を実施しました。

第三回は7月17日に
『東海道五十三次と大津宿の賑わい』

第三回は、昔の宿場のお話しを各地から依頼され講演をされている、「草津市街道交流館」館長の八杉さんによる講演でした。

八杉さんの話では、古代からの道の概念から始まり、飛鳥時代は中央と地方の官庁間を連絡する「駅制」となった。江戸期になって道は≪庶民が通る道に！≫なり、もっとも「道」が人々の身近になって、江戸の宿場宿駅制度に繋がったとのことです。

江戸時代になって「宿駅伝馬制度」が敷かれ、各宿に人馬会所が設けられ人足、馬、諸役人まで細かく幕府によって決められたこと。また本陣の役割や大名を迎える際のシステムなどを詳しく説明して頂きました。

また、旅人に向け多くの「名所図会」が発行されたとのこと。そして旅人自身による紀行文や旅日記が記録されたのですが、大津宿の場合宿場の詳細な記載は殆ど無く、関の清水・蝉丸伝承・近江八景・膳所・義仲寺・三井寺といった観光名所のことがほとんどであったそうで、観光地として、多くの人々の人気を集めた宿場だったことが良く分かりました。

長安寺にある
小野小町の供養塔

秋 後期『萬塾』にご期待を！

『萬塾』はこの秋後期講座を用意しました。昨年お寺を巡りその宗派と教義を聞く講座を行い好評でしたが、秋の講座では４００年を経る寺院のお宝を知る講座を計画しました。

第一回　１１月５日（土）午後２：００より

三井寺は国宝と重要文化財の宝庫

１４００年の歴史を有する長等山園城寺（三井寺）は広大な寺領を持つ大寺院でした。この三井寺は国宝や重要文化財に指定されている建造物、書画、彫刻を多く抱えています。三井寺の貴重な文化財をパワーポイントによる映像を観ながら、福家執事長に詳しく解説して頂く講座で居ながらにして三井寺の全容を知ることが出来ます。

第二回　１１月２７日（日）午後１：００より

大津のお寺の貴重なお宝拝見！

江戸時代の「大津百町」には６０ヶ寺を数える各宗派の寺院がありました。４００年を超えこの大津の歴史を有する多くの寺院がまだ残っています。今回はそのなかの５ヶ寺を巡り貴重なお宝を拝見させて頂きます。寺院としては①永順寺（浄土真宗）②乗念寺（浄土宗）③傳光院（浄土宗）④青龍寺（曹洞宗）⑤徳円寺（浄土真宗）を巡回訪問します。

第三回　１２月　４日（日）午後１：００より

終活のすすめ

最近「終活」って言葉をよく耳にしませんか、人生の終い方とは？

後期の最後は知っておいて損はない、「終活」についてそれぞれの分野の専門家からお話しを聞き、最後は生前に入ると長生きできると云われている「入棺体験」も行います。①終活の考え方　②安全に暮す為の整理　③終活の実務　④葬儀の実際　と充実した内容です。

お早目の申込みを

必ず事前申込みをお願いします。

□受講料
　１講座￥１，０００、　　３回連続￥２，５００
□会　場　１回～３回までいずれも大津百町館
□　申込み先　☎・FAX　０７７－５２７－３６３６
　　Ｅメール　otsu.machiya@gmail.com
□連続申込みされた方には〒振込用紙を送付します。

『天与　招能庵』

昨年１月に、浜通りの、これまでバーのあった建物が立て替えられて、能楽堂ができたので、びっくりしました。どんな教養人が建てられたのか、恐る恐る尋ねました。この能楽堂を建てられたのは、北村初子さんで、「天与　招能庵」と言います。北村さんは、女学校のころから謡を始められ、大学から本格的に能を学ばれました。高校の数学と物理を教えられていたそうです。観世流謡曲名誉師範で、「世阿弥の曲に親しむ会」として、毎年 10 回、この謡曲と能の鑑賞会をやっておられます。（8 回は伝統芸能会館で、2 回は天与　招能庵で）その内容は、能や世阿弥の話、能鑑賞の手引き、世阿弥の曲を聴く、小謡練習などです。若い方、新しい方に、謡や能を知ってもらいたいという熱意が伝わってきました。

この「天与　招能庵」は、入ったところが客席となっていて、その奥が能舞台になっています。2階は稽古場で、鏡の間（着替え・準備の部屋）と 10 名ほどの客席にもなります。最初、平屋の簡単な建物を作ろうと考えておられたのですが、寺社建築の大工さんと相談しながら建てているうちだんだん本格的になってしまって、正面には日本画の安土優先生の描かれた松の鏡板のある檜舞台で、水甕も埋めてあり、立派な建物になって、お金を使い果たしてしまったので、生活は質素にしているのだそうです。

住所は、浜大津２－３－２（浜通り）、
電話５２２－１０４８です。

会の今後の予定は、12 月 6 日、1 月１０日、2 月 7 日、3 月 7 日１４時～１６時（1 月のみ天与　招能庵、他は伝統芸能会館）（500 円、要申込み）で、この他、11 月、29 年 1 月、3 月のそれぞれ第４木曜 13 時～15 時半には天与　招能庵で、県下の謡曲同好会の先生方による名曲の研究会（拓謡会）が公開で催される（無料）ので、どなたでもお越しくださいとのことです。

取材　［会員　竺　文彦］

今「大津百町館」の旧坪庭跡に文化・天保・慶応といった年号が箆書きされた瓦を置いています。以前にもこの『大津百町瓦版』で松本瓦のことを紹介しましたが、再度この松本瓦を振り返ってみました。

この瓦は全て大津百町館の屋根に載っていたものです。文化一三年と言いますと(１８１６)丁度今から二百年前に製造された瓦です。現在平野学区となっている松本村には井上七左衛門、飯塚出雲守、清水九太夫、吉川新兵衛と名乗る多くの工人工房があって瓦の一大産地でした。

このことは、当時の古文書『近江興地志略』には「瓦土を採取ところなり…この辺の土性よく、瓦を造るにすぐれたり…高き所も日々低くなり、樹木ある山も次第に切り開きて田畑となせり…」と記されています。

また松本村絵図(１８０８)には、「字瓦屋」「字土取場」が記され、東海道名所図絵(１７９７)の石場港あたりにも「瓦師」と、さらに平野神社境内には製造された瓦が天日干しされている絵図も・・。

この松本の瓦工房にはシーボルトも訪れ「江戸参府紀行」(１８２６)にヨーロッパの瓦との違い、同一の種類だけでなく異なった用途に応じ沢山の種類があり、幾日も粘土を足で踏んで四角の大きな塊にし・・と非常に詳しく書いています。実は、いま一般に多く屋根瓦として利用されている桟瓦は一七世紀後半に大津で発明されました。その後火災の多いこともあって江戸幕府の推奨により全国に広まったと云われています。

江州志賀郡松本村瓦師井上七左衛門銘・慶応元年製造の瓦

二百年前の松本瓦を一度見に来てください。

2016.2　等正寺別所山等正寺（真宗大谷派）

近松寺から長等公園を経て、小関越えの道を山科方向に歩いたところに等正寺がある。東本願寺の伝統行事「蓮如上人御影道中」で、越前吉崎へ向かう旅の最初の宿泊地でもある。

さて、その越前吉崎に蓮如上人がいたころ、坊舎が不審火で炎上、さらに応仁・文明の大乱で加賀守護の富樫家に内紛がおこり、一向一揆衆がこれに介入するなどで、ついに蓮如は越前を離れ河内へ移動。そして63歳のとき念願の本願寺が京都山科に再建される。

三井寺が返し渋った親鸞祖像の返還をめぐり、殉教者となった堅田の漁師源兵衛の首であるが、実は等正寺だけではなく、さらに２カ寺に安置されているのだという。ひとつは堅田にある光徳寺。あと一つがここ長等の両願寺だ。

2016.4　両願寺

両願寺は源兵衛の首を擁しながらも、真宗寺院には転じずに三井寺円満院に属して今日まで至っているようである。親鸞祖像と引き換えになった形の源兵衛の首が、三井寺が預かったままなら両願寺に安置されているのもわかるが、首を差し出されるのが三井寺の本意でないなら、やはり首も返され真宗寺院にて葬られるのではないかとも思える。いったいどの首が本物なのか、真相は謎のままだっ(笑)。

三井寺観音堂の参道を挟んで長等神社のすぐ横にあるこの両願寺は、現在は無住管理のようで、三浦家の放漫経営による円満院差し押さえ事件当時の文書が貼ったままになっている。少し荒れ寺になっているのが心配だが、適切な管理がされるのを望んでいる。

2016.4　三井寺観音堂

両願寺横の料金所で拝観料を払って、長い石段を登りつめると、西国三十三カ所霊場第十四番札所の三井寺観音堂がある。もちろん巡礼の参拝者が、本尊の如意輪観音への信仰、また納経ご朱印を求めて訪れる聖地。だが、この観音堂の左余間には、蓮如が大津を去り山科本願寺に移るときに残したとされる六字名号、さらに江戸時代に安置されたとする親鸞聖人木像と蓮如上人木像があり、真宗門徒の隠れた参拝スポットでもある。三井寺では明治のころまで「報恩講」が勤まったと言われている。源兵衛首事件のようなことはあっても、蓮如と三井寺、またその後の本願寺教団と三井寺は、終始友好的な関係にあったと考えていい。

この祖師像と名号は、普段公開されておらず直接見ることはできないが、私は幸運にも直接拝観させていただいている。一昨年智証大師生誕１２００年法要で秘仏一斉公開の時、通常３３年に一度しか公開されない観音像とともに公開されたからだ。

2016.3　倭神社

倭神社（しどりじんじゃ）へ行ってきた。拝殿もなく小祠堂だけあるこの神社は、「赤塚古墳」と呼ばれる古墳の上に立っているのだ。すでに江戸時代から神社であったので、発掘調査は行われておらず、測量や記録などから中期古墳と推定された。

祭神が天智天皇の皇后・倭姫王（やまとひめのおおきみ）とされ、古墳の被葬者と思われていたようだが、彼女は7～8世紀に没したと考えられ推定年代と合致しない。「倭」はおそらくしずおり（倭文織）のことで、だとすればやっぱり紡績に従事した渡来人の職掌に由来するのでは？（私の個人見解。根拠なし）と思う。倭姫王は、天智紀に名前のみ登場し事績は伝わらない。大化改新クーデター（乙巳の変）後に天智に滅ぼされた古人大兄皇子の娘であること、天智との間に子どもがいたとは記されていないこと、壬申の乱までは存命だったことのみわかっている、古代の謎の人物の一人である

2016.4　准三宮道澄の墓

皇子が丘公園を散歩していると、大津市が資材置き場として造成工事している場所があり、そのそばに何やら看板が打ち捨てられていた。「なんだこれは？」近寄ってみると、「准三宮道澄の墓」と書かれた、大津市が設置したものだった。

文字の判別も困難ではあったが、なんとかつないでみると、道澄は三井寺の長吏（門主）をつとめた高僧。豊臣秀次失脚に連座して三井寺は取り壊されるが、その再興を発願し尽力する。その甲斐あり金堂はじめ諸堂宇が再建。三井寺は復活した。1608年に遷化した道澄の遺体は、当時三井寺北別所のあったであろう、この近くの山上墓地に葬られ建墓されたのである。
早速にその墓地に行ってみると、いちばん上になる位置にそのお墓はあった。「准三宮道澄墓」、およそ高僧の墓とは思えない、顕彰碑的な形のものがどんと置かれていた（三井寺でよく見かける僧侶の墓は五輪塔とか無縫塔などが多い）。この准三宮（じゅさんぐう）とは、皇后皇太后太皇太后に準ずる地位として、摂関職や高僧、将軍などの一部に特別に与えられた称号。
これは「わが街文化財」即認定だ。それにしても、まだまだ知らないことばかりの大津の歴史の深さに驚き、そしてあまりにずさんな大津市の対応にも驚いたのだった。

16.9　鳴滝不動尊

膳所の山中にある鳴滝不動尊。これは昨年の写真。今年は大谷～音羽山～鳴滝不動尊を歩こうと思ってたけど、足底筋膜炎いまだ癒えずに果たせていない。膳所側からここまでは比較的歩きやすい道だ。

大津市内は天台密教、とくに三井寺系のお不動さんがいたるところに見られる。ここも三井寺かと思っていたが、看板を見ると京都左京の聖護院門跡（本山修験宗総本山）に属する不動堂だった。聖護院門主の宮城泰年師の著書を読んでみると、修験道（山伏）を支えているのはプロのお坊さんより、門信徒さんの比重が大きいようである。いつからこの不動堂があるのかわからなかったが、古来民間信仰に支えられた「わが街文化財」だ。
「仏説聖不動経」という短いお経は、読誦するのにちょうどいい分量なのだが、その中にお不動さんは特定の仏国土に住まず、つねにわれわれ衆生の心に住むのだとある（無相法身虚空同体なればその住処なしただ衆生心想の内に住したまう）。密教にしか登場しないはずの明王だが、不動明王だけはその普遍的な人気で、浄土や禅のお寺、神社にまで祀られるようになっている。

編集後記　今号の２ページ松嶋洋裁学院の町家の取壊しは本当にショックでした。シリーズで掲載している「山内博貴が巡る大津の文化財」には掲載記事が少ないなかで助かっています。
またこの『瓦版』を編集していると観光の目玉として全国に向け発信しアッピールできるものが一杯あることを毎号思います。　【K・A】